

D・デルブレユ『アポリネールとその物語作品』

川口, 藍

<https://doi.org/10.15017/10047>

出版情報 : Stella. 20, pp.153-156, 2001-09-10. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :



D・デルブレイユ『アポリネールとその物語作品』

川 口 藍

「詩と散文の関係」はアポリネール研究の重要課題の一つである。だがアポリネール＝詩人というイメージがあまりに広く流布しているせい、研究の対象は圧倒的に詩作品に偏っている。散文作品に关しては、論文は多数発表されているものの単行書の点数はすくない。たしかに、散文作品に正面から取り組んだ代表的研究書として1964年刊のアンドレ・フォンテーヌ『散文作家アポリネール——異端教祖株式会社』¹⁾がある。だがこれは副題が示すように『異端教祖株式会社』だけに焦点を絞る、他の散文作品については、爾後の研究への期待表明に止まっている。こうして自らのフィールドを限定したうえで著者フォンテーヌはテーマ別に分析を進めるのだが、60年代以降にいわゆるヌーヴェル・クリティックが果たした目覚ましい発展からすれば、彼のアプローチの古さは否めない。それにもかかわらず同書が今日なお若き研究者の指針としての役割を担いするのは、ここ30年余り、彼の後を引き継ぐような研究書が一冊も世に問われていないという否定的事情ゆえに他ならない。

だがアポリネール作品を取り巻く環境が60年代以降大きく変化したことはやはり確認しておくべきだろう。ミシェル・デコーダンの先駆的研究により資料体は組織的に整備された。ごく部分的な資料体を限定的に取り扱うフォンテーヌの研究も、個別の問題設定から複数の作品を視野に入れるジャン・ビュルゴやクロード・ドゥボンらによる後続研究も、デコーダンの実証的研究なくしては存在しなかったに違いない。そしてこれらの先行研究を受け、アポリネール研究の刷新を図るべく出版されたのが、本著『アポリネールとその物語作品』²⁾なのである。

同書はアポリネールの全散文作品をとりあげ、統合的に作家のエクリチュールを定義づけようとした野心作だ。分析の対象も広汎であり、目次だけでも7ページ、本文は700ページを超える大冊である。しかし分析は簡潔化され、計

算しつくされた明快さを読者に提示してくれる。以下にその具体的な内容を大まかに紹介しよう。

第1章は「物語作品」と題され、テキスト分析への導入をなす。まず、作品出版当時の作家達の社会的状況とアポリネールの商業的戦略とを照らし合わせながら彼の出版活動全体についての報告が行われる。ここでデルブレイユは、書簡や献辞、エピグラフ、宣伝文といったエピテキストの検証からアポリネールの散文作品にたいする態度、すなわち自作品を万人に理解させたいという欲望とテキストの意味を開かれたままにしておきたいという欲望との拮抗を浮き彫りにする。ジャンルの問題にも相当数のページが割かれている。同一作品内で、エクリチュールが詩と散文のあいだを揺れ動き、その揺れが演劇的效果を生み出す点は勿論のこと、虚構と現実のあいだを絶え間なく往復するエクリチュールについても考察が及ぶ。ここで著者は、個々の物語がロマン、コント、ノベルといったジャンルに容易には区分しがたい点を強調し、その最大の難関が『腐っていく魔術師』であることを指摘する。

「語り」と題された第2章は、ナラトロジーの方法論に依拠し、説話形式によるアポリネール作品の整理・分類を試みる。アポリネール作品に登場する〈je〉の問題を出発点にデルブレイユは、語りの形式が異質物語世界的語り手によるものと等質世界的語り手によるものに二分可能であると指摘する。あわせて彼は、等質物語世界的語り手の中でも自己物語世界的語り手の形式は拒否される傾向にあり（つまり語り手は「傍観者」あるいは「証言者」の形をとることが多い）、異質物語世界的語り手でさえ登場人物の思考に浸透し影響を及ぼすことがある点に着目する。またアポリネール作品には上の分類に当てはめることのできぬ曖昧な説話形式が存在する点にも注意を促す。例えば『腐っていく魔術師』は説話形式の混在として説明できる。分類作業はさらに語り手のタイプの分類から言説自体の分類へと発展し、フォンテーヌが一章を割いた語りの「調子」の問題を検討するに至る。ここで著者は、アポリネールの物語の調子の多様性と不安定さを強調した上で、主題の高尚さに反比例して下降していく調子、あるいは主題の卑小さに反比例して高揚していく調子という傾向を論証している。

「空間＝時間」を扱う第3章では、まず物語の時間が検討される。アポリネールの物語は現在のこととして語られることが多いが、この現在とは、著者

によれば現在性を失っている。また過去に起こったとされる事象が語られる場合、語りの時間と物語世界とのあいだに生まれる距離を読者が正確に測ることはきわめて困難である。逆にその距離が明言してある場合でも、物語世界の時間を日付によって限定することは不可能である。著者も指摘するように、アポリネールにおける時間の指標はある種の罫なのである。この罫こそ物語のテンポの多様性、さらにその断絶という独特の技法を生み出す要因の一つであるのだ。空間についてデルブレイユが示す分析も傾聴に値する。具体的な地名や地理にかんする考察に加え、空間描写の技法、またこれら2つの技法の攪乱（地名による遊びや地理を利用した錯覚、空間の多重化や分割）の分析をつうじ、著者は時間と同様、空間についても指標的なシステムを破壊するアポリネールの戦略を明らかにしている。

第4章は「名前」の問題をとりあげ、アポリネールにおける名称の形式と機能を考察する。まず匿名、実在する人物の氏名、さらにそのパロディーの関係が整理される。さらに筆者はさまざまな登場人物の名前を作り上げるさいにアポリネールが使用した技法、つまり名前の縮小化、コードの結合・交換による音遊び、音やつづり字の模倣といった技法に言語学的な検証を加える。章末では、キリスト教に関連する名やいくつかの特権的な名、家族やアポリネール自身の氏名がとりあげられ、登場人物の性格決定に影響を及ぼす人名の働きが検討されている。

第5章で筆者は「名前」に続き、「人物描写」を問題にとりあげ、情報を記録するためのトポスとしての人物描写に関連する技法を整理している。対象となる技法は心理学的形容、伝記情報とその時間的変容、社会的な形容や専門知識による形容など多岐にわたる。さらに登場人物が属する民族や性別が人物像に付加価値を与えるという人物描写の機能にも議論が及ぶ。また人物描写ではいうまでもなく身体が重要な役割を担うが、デルブレイユは身体の一部や衣服が、提喩や婉曲語法、誇張、暗示的看過法などのレトリックによって強調される点にも注目する。同時に彼は、人物描写の内的撞着からは登場人物の隠された意味が、そして外的撞着からは登場人物同士の対立関係が見出される、という大変興味深い指摘をしている。

第6章は「筋の展開」と題され、登場人物とプロットの関係が検討されている。著者によればアポリネールの物語は、その登場人物の数により二分でき

る。少数の登場人物に限られたタイプと群集が現れるタイプである。この分類を起点に、デルブレユは限定された登場人物にせよ、群集にせよ、プロットはある一定のイデオロギーとポジティブあるいはネガティブな関係を結びながら展開していくことを論証している。

以上、限られた紙幅ではとうてい万全は尽くしがたいが、『アポリネールとその物語作品』の概略を紹介した。デルブレユは、フォンテーヌ以降のアポリネール散文作品の研究の発展、さらにジュネットをはじめとするナラトロジーの発展を考慮しつつ、アポリネールの語りのエクリチュールを整理し体系的な見取図を描こうとした。かかる意図のもとに彼は、およそ散文作品にかんするありとあらゆる問題を取りあげたうえで、それらをもっぱら説話論的技法の分類によって解決しようとしている。このため浩瀚な研究でありながら、様々な分析が開かれたままで終わっている点に若干の不満は残るかもしれない。しかしながら、このまさに著者が提示する問題の多様性からは、散文作品の世界が詩作品のそれに劣らぬ豊穡を備えることが容易に看取される。アポリネール散文作品の今後の研究にとって本書が大きな指針たりうると強く予感させる所以である。

註

- 1) Daniel DELBREIL, *Apollinaire et ses récits*, Fasano: Schena / Paris: Didier Érudition, 1999, 743 pp.
- 2) André FONTEYNE, *Apollinaire prosateur. L'Hérésiarque et Cie*, Paris: Nizet, 1964, 189 pp.